委員会視察成果報告書

令和８年１０月１５日

犬 山 市 議 会 議 長

議員名　柴山　一生

下記のとおり、視察の成果を報告いたします。

(1) 視察年月日	令和８年１０月６日(火) ～ 令和８年１０月７日(水) （　１泊　２日）
(2) 視 察 地	兵庫県三木市、兵庫県姫路市
(3) 視察の種類	(常任)・特別 委員会 (民生文教委員会)
(4) 視察成果 (視察地ごとに記入)	別紙のとおり
(5) 犬山市に対する提言	別紙のとおり

犬山市議会 受付 8.10.15 275

令和８年１０月１５日

視察報告書
民生文教委員会　柴山一生
令和８年１０月６日～７日

1三木市における学校の在り方及び学校再編の検討について
2姫路市
1. 視察先
絵里和８年１０月６日　兵庫県三木市

2. 視察テーマ
学校の在り方及び再編検討について

3. 視察目的

少子化に伴う児童生徒数の減少や学校規模の適正化が課題となる中、三木市における学校再編の検討経過、小中一貫教育の推進、地域と連携した学校運営、通学手段の確保などについて調査し、犬山市の今後の学校教育及び学校再編の検討に資することを目的とした。

4. 視察内容

(1) 学校再編の検討経過について

三木市では、将来を見据えた学校の在り方について検討を進め、学校再編に関して地域との対話を重ねてきた。

学校再編の検討に当たっては、一定規模の集団を確保することが重要な視点とされている。児童生徒が多様な考え方に触れ、互いに切磋琢磨しながら成長できる教育環境を整えることが求められているためである。

また、再編検討会議において有識者も交えた議論を行うとともに、地域説明会を 54 回開催し、地域住民の理解と意見の把握に努めてきた。

さらに、令和４年には「三木市小中一貫教育推進協議会」を設置し、検討を重ねた上で、令和５年１月に教育委員会へ意見書を提出している。

このように、学校再編を単なる施設の統廃合として捉えるのではなく、子どもたちにとって望ましい教育環境とは何かという視点から、継続的な検討を進めている点が印象的であった。

（2）吉川地区における義務教育学校の整備について

三木市では、市中心部への通学が難しい吉川地区の地理的条件を踏まえ、同地区に小中一貫教育を行う学校を整備する方針であり、令和12年の開校を目指している。

市内全域で一律に学校を統合するのではなく、地域の実情や通学の負担を考慮し、地域に学校を残しながら教育環境の充実を図ろうとしている点に特徴がある。

また、吉川地区の学校については、特認校制度を活用する可能性も検討されている。ただし、その場合も吉川地区の教育の理念や地域性を基礎とする考え方が示された。

小中一貫校のモデル校を吉川地区に設け、その実践を通じて教育上の効果を検証することも重要な目的となっている。

特に、同一の施設で9年間を過ごすことが、児童生徒の学力、生活習慣、社会性、異学年交流などにどのような影響を与えるのかを見極める必要があるとの説明があった。

（3）小中一貫教育の効果と課題について

小中一貫教育を導入するに当たっては、施設を一体化すること自体を目的とするのではなく、9年間を通じた教育課程の編成や指導方法の改善によって、どのような教育効果が得られるのかを検証する必要がある。

小学校から中学校への進学に伴う学習面・生活面の変化を緩和し、教職員間の連携を強化することは、小中一貫教育の利点として期待できる。

一方で、学年の区切り方や発達段階に応じた指導、上級生と下級生の関係づくり、教職員の負担など、導入後に検証すべき課題もある。

三木市が吉川地区をモデル校として、その成果と課題を確認しようとしていることは、今後の学校再編を考える上で参考になる取り組みである。

（4）スクールバスの運行について

三木市では、スクールバスを 14 台運行しており、吉川地区でも複数のバスを運行して通学手段を確保している。吉川地区では 6 台を運用しているとの説明があった。

車両についてはリースを活用する方法が多く採用されている。

学校再編により通学距離が長くなる場合、児童生徒の安全確保と通学時間への配慮が不可欠である。特に、地理的条件によって公共交通機関の利用が難しい地域では、スクールバスの運行体制が学校再編を進める上で重要な要素となる。

一方、車両の確保だけでなく、運行経費、運転手の確保、乗車時間、停留所までの移動、安全管理なども含め、持続可能な運行体制を構築する必要がある。

(5) コミュニティ・スクールと地域との連携について

学校運営協議会を通じて、学校と地域が学校運営の方針や教育活動について協議する仕組みが設けられている。

学校再編においては、校舎や学級数などの条件だけでなく、地域における学校の役割や、学校を中心として形成されてきた地域のつながりにも目を向ける必要がある。

学校運営協議会などを通じて、保護者や地域住民が学校運営に参画することは、学校への理解を深め、地域の特色を生かした教育活動を進める上で有効である。

また、三木市では小学 5 年生を対象に、4 泊 5 日の自然学校を実施している。事前にオンライン会議などを活用して準備を進める取り組みも行われている。

宿泊を伴う体験活動は、自然への理解を深めるだけでなく、仲間との協力、自主性、責任感などを育む機会となる。学校内での学習に加え、地域や自然を生かした体験活動を重視している点も参考となった。

5. 視察を通じて得られた考察

今回の視察を通じて、学校再編は児童生徒数の減少に対応するための施設整理にとどまらず、将来の地域社会と教育の在り方を一体的に考える取り組みであると認識した。

特に、次の 3 点が重要である。

第一に、学校再編には、子どもたちにとって望ましい教育環境を明確にすることが必要である。一定規模の集団を確保することには教育上の意義がある一方、小規模校にも地域との密接な関係や個に応じた指導などの利点がある。学校規模の大小だけで判断せず、それぞれの長所と課題を比較検討する必要がある。

第二に、地域住民との対話を十分に重ねることが重要である。三木市が54回の地域説明会を実施してきたことは、学校再編が地域にとって大きな関心事であり、丁寧な説明と意見交換が欠かせないことを示している。再編方針を決定してから説明するのではなく、検討段階から地域の意見を取り入れる姿勢が求められる。

第三に、通学手段や地域との連携を含めた総合的な計画が必要である。学校の統合によって通学距離が延びる場合、スクールバスの運行や安全対策を併せて検討しなければならない。また、学校が地域コミュニティに果たしてきた役割についても十分に考慮する必要がある。

6. 犬山市への提言

(1) 将来の児童生徒数を踏まえた学校の在り方の検討

犬山市においても、地域によって児童生徒数や学校規模に違いがあることを踏まえ、将来の人口推計、学級数の推移、施設の老朽化などを総合的に分析し、中長期的な学校の在り方を検討する必要がある。

その際、単に学校規模の適正化を目指すのではなく、子どもたちが多様な人間関係を築き、互いに学び合える環境をどのように確保するかという教育的観点を基本に据えるべきである。

(2) 小規模校のメリットを生かした教育の検討

犬山市には、小規模校の特色を生かした教育を検討する余地がある。

学校の統合だけを前提とするのではなく、少人数教育の利点を生かしながら、他校との合同授業、オンラインによる交流授業、合同行事、地域の人材を活用した学習などを組み合わせることが考えられる。

さらに、地域の自然や歴史、文化を教材として活用し、学校の規模にかかわらず質の高い

教育を受けられる環境を整えるべきである。

(3) 小中一貫教育の効果検証と段階的な導入

三木市の吉川地区の取り組みを参考に、犬山市においても小中一貫教育の導入効果や課題について研究を進めることを提言する。

導入に当たっては、施設一体型、施設分離型などの形態を比較し、地域の実情に応じた方法を検討する必要がある。

また、学力の向上だけでなく、不登校の状況、児童生徒の自己肯定感、異学年交流、教職員の連携、保護者の評価など、複数の観点から効果を検証することが重要である。

(4) 学校再編の検討段階から地域住民が参加できる仕組みの構築

学校は、子どもたちの学びの場であると同時に、地域コミュニティの拠点でもある。

そのため、学校再編の検討に当たっては、保護者、地域住民、学校関係者、有識者などが参加する協議の場を設け、地域の意見を継続的に把握することを提言する。

説明会の開催にとどまらず、複数の選択肢を提示した上で意見を聴き、寄せられた意見がどのように検討結果に反映されたかを丁寧に説明することが大切である。

(5) スクールバスを含む通学環境の総合的な整備

学校再編を検討する際には、通学時間や安全性、保護者の送迎負担などを具体的に把握し、必要に応じてスクールバスの導入や運行ルートの見直しを検討すべきである。

車両の購入とリースの費用比較、運転手の確保、維持管理費、運行委託の可能性などを整理し、将来にわたって持続可能な通学支援体制を構築する必要がある。

(6) コミュニティ・スクールの機能強化

学校運営協議会を活用し、学校と地域が共に子どもを育てる仕組みを一層充実させることを提言する。

地域の人材や施設を活用した体験活動、自然学習、地域行事への参加などを通じて、子ど

もたちが地域への理解と愛着を深められる教育環境を整えることが望ましい。

また、学校再編を行う場合にも、再編後の学校と地域との関係をどのように維持・発展させるかを、あらかじめ計画に盛り込む必要がある。

7. まとめ

三木市の取り組みから、学校再編を進める上では、一定規模の集団による教育効果を確保するとともに、地域の地理的条件や住民の意見を尊重し、学校の特色を生かした教育環境を整えることが重要であると学んだ。

犬山市においても、少子化や学校施設の老朽化などの課題に対応するため、将来を見据えた学校の在り方について検討を進める必要がある。その際には、統廃合ありきではなく、子どもたちにとって最善の教育環境は何かという視点を出発点とすべきである。

今後は、児童生徒数の将来推計を踏まえた学校規模の検討、小中一貫教育の研究、小規模校の特色を生かした教育、地域住民との協働、通学支援体制の整備などを一体的に進めることを提言する。

学校は、子どもたちの未来を育む場であると同時に、地域の将来を支える重要な基盤である。犬山市においても、教育の質の向上と地域の持続的な発展を両立させる学校づくりを進めることが望まれる。

2姫路市

1. 視察先

絵里和８年１０月７日　兵庫県姫路市

2. 視察テーマ

子育て世代に届く行政情報の DX 推進

3. 視察目的

(1) 姫路市の子育て世代に対する行政情報の DX 化

今回の視察では、デジタル技術に慣れ親しんでいる子育て世代などに対し、市役所からの情報をより見やすく、迅速に届けるため、DX を推進している取り組みについて学ぶことができた。

市民の情報収集手段は、紙媒体や広報紙だけでなく、スマートフォンを中心としたデジタル媒体へと広がっている。特に子育て世代にとっては、仕事や育児で忙しい日常の中でも、必要な行政情報を手軽に確認できることが重要である。

行政からの情報発信についても、単にホームページに情報を掲載するだけでなく、市民が必要な情報に容易にたどり着けること、情報が適切なタイミングで届くこと、内容が分かりやすいことが求められる。

こうした観点から、デジタル技術を活用し、市民の生活スタイルに合った情報発信を進めることは、行政サービスの利便性向上につながると考える。

犬山市においても、子育て支援、保育、健康、各種手続き、イベントなどの情報を、必要とする市民に分かりやすく、迅速に届けられる仕組みを一層充実させる必要がある。

DX は、単に紙の情報をデジタル化することではない。市民の立場から情報の届け方そのものを見直し、行政サービスをより利用しやすくする取り組みであると認識した。

3. 併せて行った姫路城の見学と所感

今回、姫路市から姫路城の入場券をいただいたこともあり、併せて姫路城を見学し、天守最上階まで実際に登閣する機会を得た。

姫路城は、世界遺産として知られる歴史的価値の高い城郭であり、城内を歩きながら建築の構造や歴史を体感できることも大きな魅力である。実際に最上階まで自分の足で登ることで、城郭を訪れる楽しみは、建物を見学するだけでなく、登閣そのものの体験にもあることを改めて感じた。

一方、最上階からの眺望については、窓や開口部の位置などの関係から、外の景色を限られた隙間から見る形となり、広く景色を見渡せなかったことは残念であった。

この経験を通じて、犬山城のように天守最上階の外回廊から周囲を見渡せる構造は、登閣者に開放感と大きな満足感を与える重要な魅力であると改めて実感した。木曽川や城下町、周囲の山並みを眺められることは、犬山城ならではの貴重な体験である。

姫路城と犬山城では、建築構造や文化財としての保存上の条件が異なるため、単純な比較はできない。しかし、歴史的建造物の魅力は、その歴史や建築美だけでなく、訪れた人が

現地で何を感じ、どのような体験を持ち帰るかによっても大きく左右される。

今回の見学は、犬山城の外回廊からの眺望という特徴を、来訪者の満足度という観点から改めて考える機会となった。

4. 犬山市への提言

(1) 市民目線に立った行政情報の DX 推進

犬山市においても、子育て世代をはじめとする市民が、必要な行政情報をスマートフォンなどから簡単に確認でき、適切なタイミングで受け取れる仕組みをさらに充実させるべきである。

例えば、子育て支援制度、保育園の情報、健診や予防接種のお知らせ、各種申請手続き、地域のイベント情報などについて、情報を探しやすく整理するとともに、プッシュ通知などを活用して必要な情報を届けることが考えられる。

行政の情報発信は、情報を掲載する側の都合ではなく、情報を受け取る市民の立場から設計することが重要である。利用者が必要な情報にたどり着きやすいか、内容を理解しやすいか、手続きが簡単になっているかという観点から、継続的に改善を図る必要がある。

一方、高齢者などデジタル機器の利用に不慣れな市民にも配慮し、紙媒体や窓口での案内など、従来の情報提供手段も適切に維持することが求められる。

DX の推進に当たっては、デジタル化そのものを目的とせず、誰もが必要な行政サービスを利用しやすい環境を整えることを目指すべきである。

(2) 犬山城の魅力を体験価値として発信する

姫路城を見学した経験から、城郭観光では、歴史や建築の価値に加え、来訪者が実際に体験できる魅力も重要であると感じた。

犬山城は、天守最上階の外回廊から木曽川や城下町などを眺められることが、登閣者にとって大きな魅力となっている。

犬山市においては、犬山城の歴史や文化財としての価値に加え、外回廊からの眺望、木曽川との関係、城下町の景観など、現地でしか味わえない体験価値を積極的に発信していく

ことを提言する。

写真や動画、SNS などを活用し、実際に天守最上階から見える景色や、登閣して初めて感じられる魅力を分かりやすく紹介することは、来訪意欲の向上につながる可能性がある。

文化財の保存を大前提としながら、犬山城ならではの魅力を最大限に伝え、訪れた人が満足感を得られる観光振興を進めるべきである。

5. まとめ

今回の行政視察では、デジタル技術を活用し、市民、とりわけ子育て世代に行政情報を分かりやすく迅速に届ける取り組みについて学ぶことができた。

また、姫路市から入場券をいただいたことを機に姫路城を見学し、天守最上階まで登閣した経験から、犬山城の外回廊からの眺望が、来訪者にとって大きな満足感をもたらす魅力であることを再認識した。

犬山市においても、市民目線に立った行政情報の DX を推進するとともに、犬山城の歴史的価値だけでなく、外回廊からの眺望など、実際に訪れることで得られる体験価値を積極的に発信し、市民サービスの向上と観光振興につなげていくことを提言する。